

世界の無化と物象化の間で

後期西田存在論の基礎・再考

猪ノ原次郎(北海道大学)

後期西田幾多郎は、彼の存在論の基礎概念である「個物」について、次の二つの基本的主張をしている。(1)個物は自己自身を限定し、他から限定されない独立なものである。(2)個物は個物に対することによって個物である。——ここからも窺えるように、彼のいう個物とは、単に他と区別される particular ではなく、「唯一独立」で自ら活動する「個性」であり、individual あるいはむしろ singularity とでも訳されるべきものであった。

ところで西田によれば、(1)と(2)は「矛盾」しており、「個物の概念そのものが矛盾を含んでいる」。これは(1)と(2)の双方が「どこまでも」とか「絶対に」といった副詞付きで述べられていることを念頭に置けば了解されよう。たとえば我々は普通、自分や他者のことを、何ほどかは意志的に自己決定し、また何ほどかは他の事物から決定されるものと考えているだろう。しかし、二つの考えを「どこまでも」あるいは「絶対に」というふうに突き詰めていくと、結局のところ自分や他者をどんなものと考えていたのかよくわからなくなる。そこで(1)と(2)を調停する哲学的議論はいろいろあるだろうが(自己概念や他者概念を複雑にしてみたり(分析の結果、複雑なものだとわかったり)、超越論的主観性や相互主観性や身体性を持ちだしてみるなど)、ともあれ西田は調停ないし和解には向かわない。あくまで矛盾を孕んだ特異なものとして個物を捉えたいのである。というより、まさにある意味で矛盾として概念されざるを得ないところに、個物の存在様式を捕捉しようとしたのである。しかし問題は実にその“ある意味”がどういう意味かであり、単に両立しない二つの主張をしているというだけの「矛盾」なら無限定な強弁にすぎない。そこで西田の論述には常に第三の主張が伴うことになる。(3)世界は世界自身を限定する。

ポイントは、(2)から導出される「無数の個物の相互限定」とは区別される第三項として〈世界〉が導入されていることである。世界は「物の全体」ではないわけである。実際、西田にとって、世界を捉え損ねる陥穽の一つが、あらゆる統一性を要素的な〈多〉へと還元する、機械論を典型とする世界観であり、西田はその思考様式を〈多から一へ〉と定式化している。そこでは〈一〉としての世界も最終的に無化され、(1)と(2)はやはり単なる矛盾となるか、さもなくば(1)が破棄される。しかし他方、世界の実在性をそれとして確保しようとする、今度は逆に、個物＝〈多〉の働きが全体としての〈一〉から決定される目的論的世界観、〈一から多へ〉に陥る危険がある。西田はこれの範例を「過程的弁証法」、つまり自らの発展のプロセスの中で他者性(差異)を自らの他在として回収していく思考様式とみなし、彼の解釈するかぎりでのヘーゲルに帰してもいる。そうして世界が(1)と(2)を和解調停する自立的な「全体的一」としていわば物象化されるとき、(1)個物の自己限定性・独立性は却って毀損され、したがって(2)も結局は相対的な意義しかもちえない。

かくして、西田にとって世界概念の導入におけるポイントは、世界の無化と物象化の両者を回避しながら、世界の実在性を捉えることであった。

さて、論文「弁証法的一般者としての世界」(1934年)の段階では、西田は世界を主に「媒介者」や「弁証法的一般者」と規定していた。つまり、世界は個物の相互限定を媒介し、(1)と(2)

を矛盾させたまま現実とするもの、個物を切り離しつつ結びつける「非連続の連続の媒介者」である。しかし、この論法の限界は明らかではないか？ たしかに西田は、これが世界の物象化とならぬよう、個物とは世界の「個物的限定」そのもの、個物相互限定とは世界の「一般的限定」そのものであり、かくて世界は個物性と一般性が自己矛盾的に結びついた「弁証法的一般者」であるとして、個物と世界それぞれの自己矛盾をいわば表裏一体のかたちで確保する工夫を試みている。世界自身の自己矛盾は個物の自己矛盾と等根源的に解消され得ぬものであり、そのかぎりでは世界の自立的物象化は避けられるわけである。だが、この論法のみによっては結局、世界について上のような矛盾的な規定以上のものは出てこないだろう。要するに、この時点での西田の論述からは世界について両義的な語りを繰り返すほかない限界を見てとれないでもないのである。そして、そうであるかぎり、(3)の導入によっても、実質的に(1)と(2)の「矛盾」が(3)に持ち越されただけであり、肝心の個物の存在様式について具体的な洞察はもたらされていないのではないだろうか？

本発表では、まず上に概観した問題状況をテキストに則り跡づけたうえで、特に『哲学論文集第三』(1939年)以降前面に迫り出し、この問題と有意な連関をもつようになる「ポイエーシス」(制作)の概念系に着目する。我々の見るところ、西田は個物の働きを制作として徹底して把握し直し、(1)と(2)の内実を豊かにすることで、(3)〈世界〉の実在性ないし超越性をそれ以前とは異なる仕方で示すことができるようになった。こうした変化を描き出し、そこからあらためて西田存在論の基礎(1)(2)(3)の意義を評価することが発表の目標である。

西田研究の現況を眺めると、『哲学の根本問題』(1933年)以降を「後期」と括ることはおおよそ共通理解となっているものの、後期の内部での変化に関しては未だ確固とした論争の土台があるわけではない。しかしながら、たとえば「弁証法的一般者としての世界」の段階で後期哲学が一応完成したとする見方がある一方で、世界の超越性(個物と世界の関係)の捉え直しにおいて後期内部に決定的な変化を認める解釈もすでに存在している(板橋:2008年、2012年)。我々は問題の所在と西田の変化の方向という大枠で後者を支持するが、変化の具体的内容についてはこれと異なる観点を提示することになるだろう。

参考文献

板橋勇仁『歴史的現実と西田哲学——絶対的論理主義とは何か』、法政大学出版局、2008年。

——「日本の哲学からみたライブニッツ——後期西田哲学の中での転回に即して」、酒井潔・佐々木能章・長網啓典編『ライブニッツ読本』、法政大学出版局、2012年、335-356頁。

小坂国継『西田幾多郎——その思想と現代』、ミネルヴァ書房、1995年。

下村寅太郎『下村寅太郎著作集』第12巻、みすず書房、1990年、第I部。

杉本耕一『西田哲学と歴史的世界——宗教の問いへ』、京都大学学術出版会、2013年。

藤田正勝『西田幾多郎の思索世界——純粹経験から世界認識へ』、岩波書店、2011年、第6章および第7章。